

## グローバル化する世界の中で生きていくために

小和田恆さん／ 国際司法裁判所裁判官

国際化とグローバル化の違いとは？ そしてグローバル社会で活躍するために求められる力とは？——  
外交の現場で培われた世界を見通す視座で若い世代に贈るメッセージ！



かながわ国際交流財団では、1994 年度から国連大学と共催で留学生を含む大学生・大学院生を対象とした「国連大学グローバル・セミナー」を実施しています。「国際社会と法の支配」をテーマとした 2016 年度のセミナーでは、基調講演者に国際司法裁判所裁判官の小和田恆さんをお招きし、「国際社会における法の支配」というテーマで、「法の支配」の概念や現代社会における意義などについて講演していただきました。今回のインタビューでは、若い世代がグローバル社会で活躍するために必要な能力や資質についてお話を伺いました。【文責：かながわ国際交流財団】

### 「国際化」と「グローバル化」は同じものか？

「国際化」と「グローバル化」という言葉は極めて似通った概念であり、しばしば同じように使われることがあります。しかし、二つの概念はその本質において基本的に違っているところがあります。「国際化」とは国家から成り立つ国際社会というものを前提として国家と国家とが触れ合う状況が深まっていく状況を表現する言葉です。典型的でわかりやすい例を挙げれば、日本の幕末・開国の状況を考えて頂ければよくわかると思います

す。つまり、それまで 300 年近く鎖国をして基本的にはどの国とも接触・交際をしてこなかった日本にとっては、他の国との交際という意味での「国際関係」は存在しませんでした。それが幕末の開国によって、日本という国が他の国々との関係をどのように構築していけば良いかという問題に迫られたのです。それが「国際化」という現象の本質だと思います。わかりやすい喩えでいえば、それは、物理学において 100 ボルトの電流で運営されている社会と、200 ボルトの電流で運営されている社会が接触するという状況に譬えられるでしょう。この二つの異

なったシステムを直接、接触させてぶつかり合わせれば、そこに電流のショートが起きます。二つの異なったシステムが直接ぶつかり合えば、一方のシステム（社会）あるいは両方のシステム（社会）が破壊されてしまいます。

幕末から明治維新後の日本政府がこの問題を解決するためにとった方法は、二つのシステムを結びつけるところに変圧器をおいて 200 ボルトの社会から流れる電流を 100 ボルトに切り替え、100 ボルトの日本社会を急激に変更することなく、200 ボルトの社会の制度を運営する手段でした。その場合に変圧器の役割を果たしたのが、政府組織で言えば外務省のような機構であり、社会一般について言えば、翻訳によって異なった文明の概念や物の考え方を日本の社会に通用する概念に置き換えることだったわけです。「国際化」という現象は、比喩的に言えばそういう形の同化（assimilation）のプロセスだということが出来ます。そのような国際化の状況は、交通手段や通信手段が発達するにつれて次第に深化してきましたが、今お話ししたような国際社会の基本的な構造は変わりませんでした。

それと対比して申し上げれば、「グローバル化」とは、A という社会と B という社会が「面」で接触し、さらに、接触し合うことを超えて一つの一体化した世界社会となっていくプロセスを指すものと考えられます。そして、それが今日我々がグローバル化する状況の中で体験していることの実態だと言えます。

例を環境問題に取ってみましょう。水俣病にせよ四日市喘息にせよ、環境の問題はかつては日本の国内だけに影響がある「国内問題」として日本政府の力で処理することというのが、国際法における統治の方式でした。しかし地球温暖化という問題ということになると、それは地球全体に影響を及ぼす問題であり、一国だけの力で解決出来る問題ではなくなってきます。世界が一体となって処理しなければならない問題となっているのです。エボラ熱、エイズなどにも同じことが言えます。

経済問題についても、同様です。関税がほとんど撤廃され、世界各国の間でモノや人が自由に動き回る状況になると、一国において経済活動を規制するやり方では問題が処理出来なくなります。政治体制の如何を越えて共通の基準に基づいた経済シ

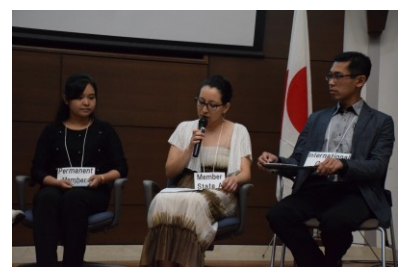
ステムをつくるが必要になります。それが現在、世界市場の中で世界共通のルールに基づいた経済活動が求められる状況が生まれてきている背景です。例えば、中国のように政治体制としては日本やその他の国々とは異なるシステムを維持している国であっても、経済問題に関しては同一の規則によって規制することが中国自身の利益でもあり世界全体の利益にも貢献するという状況が生じているのです。

政治問題についても、経済社会問題ほどではないにしても同じことがいえます。例えば、国際テロリズムの問題がグローバル化した社会に対する共通の脅威であるという認識が生まれている今日、テロリズムへの対応は一国だけで処理出来るものではなくなっています。そこで、世界的な規模において共同で対処することが必要な状況が生まれているのです。

このようにグローバル化しつつある社会の中で、人々が生きていくためには、二つのことが重要になります。一つは、歴史的・社会的に異なった背景のもとで生まれ育った人々がその社会、文化の独自性・個別性を維持しながら共存して生きていくということです。もう一つは、そういう異なった文化、伝統の中で、グローバル社会としての共通の課題に対して、同じ価値基準によって対応して生きていかなければならないということです。グローバル化する社会で生きていくためには、そのような状況の中で我々一人一人がいかに生き、いかに仕事をし、いかに活躍するかということが問われているのです。これは日本に限った現象ではなく、世界各国の人々が同じ課題に直面しているのだということがおわかりかと思います。ただ、日本の場合には、300 年近い鎖国が続いたということだけではなく、島国として長いこと世界から比較的隔絶された形で社会を営み文明を発展させてきた社会として、この問題への対応は、他の国に比べてより一層必要になっていると申せましょう。それがグローバル化する世界で日本に求められている課題です。

## グローバル化する世界の中で生きるためには？

『日本人』が『国際人』として活躍するためにはどうしたらいい



国連大学グローバル・セミナーでは、講義、ワークショップ、グループ発表などさまざまな形式で、多様な学生たちと交流しながら学ぶ



2016年度国連大学グローバル・セミナーにて

いのか？」という問いかけがよく見られます。私は実は「国際人」という言葉は好きではありません。なぜなら、これまでの日本人とは別の国際人という種族が存在して、日本人がそれに变身していくことが課題であるかのような印象を与えるからです。しかし、「グローバル化」の世界は、特殊な問題を扱う国際人、つまり「国際化」に当たって変圧器の役割を果たしたような特殊なカテゴリーの人達が問題を解決する世界ではないのです。すべての人びとがグローバル化する世界で生きていくことが求められているのです。「国際人という火星人」がやってきて問題を処理するという意味での特殊なカテゴリーの人間がいるわけではないということを頭に入れることが重要だと思います。

### グローバル社会で生きる人間として求められるもの

伝統的な日本社会では、日本人とそれ以外の「外国人」とを区別する感じ方、つまり日本社会に住んでいる人たちは「we」であり、それ以外の社会に住んでいる人たちは「they」であるという感覚が長いこと人々の心を支配してきました。しかし、グローバル化した今日の社会では全員が「we」であり、全員が一緒に問題に対処しなければならなくなっています。

そこで、日本人だから、アメリカ人だから、ケニア人だからということで異なるのではなく、すべての人が生まれ、生活し、

活動する一つの地球社会の中で生きてゆくために求められる共通の資質とは何かという問題が生じます。

私は外務省の若い人たちや大学生の皆さんと話をすると、そのような資質として重要なこととして、次の四つの言葉を挙げて話をすることがあります。

第一に挙げたいのは INDIVIDUALITY（個性を持った人間になること）です。私が留学していた時やまだ若い外交官として働いていた時に日本人に対する批判として最も言われたことは、「日本人と話をして一番つまらないのは、誰と話しても同じことしか言わないことだ」という批判でした。つまり、日本人の話も行動も金太郎飴みたいで、どういう切り口で切っても同じ顔が出てくるということです。それは、やはり一人一人の人間が個人としての個性を持っていないことに通ずる批判だと思います。その背景としては、これまでの日本の画一的な教育のやり方が一人一人の個性を伸ばすことはどうしてもおろそかになりがちだということがあげられるでしょう。今でもそのような傾向が見られます。文科省などの学習指導要領を見ていると、大学は一律にこういうことをしなさい、中学校ではこのように教えなさいといったように、画一的に枠組みを決めて指示する傾向が日本の教育では強いように感じられます。

これは学校教育に限ったことではなく、日本社会の一つの特色でもあります。そのような規制の枠組みは Individuality を抑



庄するという面があると同時に、他方規律をきちんと守ることによって社会の秩序が維持され、安定的な社会を作り出すことにもつながっているのです。物事の裏と表は常に一体で長所は短所でもあるということがよくありますが、日本人の長所と言われているものが短所となっているのです。画一的な教育や均質な社会慣習によって社会秩序が維持される一方、それに反抗する人々は村八分にされ、新しい斬新的な発明や発見がなかなか生まれてこないという状況にもつながっているのではないのでしょうか。これを打破していけないと、グローバルな社会の中で役に立つ日本人はなかなか出てこないように思われます。

何も勝手気ままなことをするという意味で個性を持つと言っているわけではありません。それぞれが個性を生かした人間として自己を啓発することから新しい人間像が生まれてくるという意味での個性を生かした人々の集団として日本社会が発展していけば、これからのグローバル化する世界の中で活躍していくことが出来ると思います。

第二に挙げたいのは IMAGINATION（想像力）を持つことが大切だということです。世界に多様な文化が存在し、異なった社会慣習、価値体系の中で生活する人びとと共生してゆくためには、「何故そうなのだろうか？」と考える好奇心を抱くことが大切です。あらゆる物事について、「人がこう言っていたから」とか、「このように教えられたから」ということではなく、「もしかしたら、それは少し違うのではないか？」と、知的な好奇心を持って自分の頭で考えることが重要なのです。好奇心と言っても様々な好奇心があります。特に若い人が言葉も習慣も違い自分にとって異質な世界の中でうまく仕事をしていくためには知的な意味での好奇心を働かすことが不可欠だと思います。言い換えれば、自分の常識では考えられないことまで思いを働かすこと（Thinking about the Unthinkable）のできる心（Imaginative mind）を育てることが大切になると思うのです。政治の問題であれ経済の問題であれ、あるいは社会のことであれ、自分にとって未知な世界の中で生きていくときには、あらゆるものに対する飽くなき好奇心を持続することが人間として成長していく上で重要なことだと思います。

第三は INSIGHT（洞察力）を身につけるということです。物事の外見にとらわれず、ことの本質を見抜く洞察力というものは、そう簡単に身につくものではありませんが、想像力（imagination）をもって何が相手をそう行動させているのかを見抜く力を養うことは、異なった歴史・文化・背景を持っている人々と関わっていかなければならない世界においては最も大切なことなのです。

日本には「以心伝心」という言葉がありますが、それは均質

な社会の中で同じ生活感情を共有する人びとの中でこそ通用することなのです。これから我々が生きてゆく多様性に根差すグローバル社会の中で共通の価値を追求するためには、自分の思いだけでなく他の人の思いを推し量る能力は、殊に重要になるのです。

最後に、INTEGRITY（「人間としての誠実さ」）を持つことの重要性を指摘したいと思います。Integrity という言葉は日本語に訳しにくい言葉ですが、辞書をひけば「誠実さ」と書いてあります。この言葉は様々な意味で使われますが、一言でいえば、「立場が終始一貫してふれない」ということであり、「何事にも真面目に取り組み、誠実で偽りのない行動をする」ことを意味するといつてよいでしょう。皆さんがどんな仕事につくにせよ、又、世界のどこで働くにせよ、どこでも通用する最も大切な資質だと申せると思います。

第2次大戦後、戦争責任を追及する国際裁判（ニュールンベルグ・東京裁判）が行われました。東京裁判では日本の戦時指導者が何人か処刑されたこと、その際にインドのパル判事が「これは勝者の裁きだ」として反対意見を書いたことは、日本でもよく知られています。しかし、この裁判の判決に対して異を唱えた裁判官がもう一人いました。それは、オランダのベルト・レーリング判事です。

彼は、パル判事とは異なり、国際法の泰斗として日本の行動が当時の国際法に照らして「平和に対する罪・人道に対する罪」を構成するものであり、その首謀者を処罰することは国際法上合法であることを認めながら、他方この裁判が客観的事実認定に基づいて厳格かつ公正な法の適用を行わなかったとして反対意見を書き、これを弾劾したのです。例えば、広田弘毅被告の処刑は違法であり同被告は無罪であると論じました（この立場は少数意見として裁判では採用されませんでした）。このようなレーリング判事の姿勢は、人間の Integrity というものを身を以て体現した一つの典型だと言えるでしょう。オランダ人は理にかなわないことは右顧左眄（うこさべん）せずにはっきり拒否するという国民性、いわば「不羈（ふぎ）の精神」を持っています。大勢に順応して自分の立場をはっきりさせないという伝統的な日本社会にありがちな対応ではグローバル化する世界では通用しないと考える必要があります。人間としての Integrity に根差す「不羈の精神」が求められる所以です。

これら四つのことがグローバル社会で生きていく上で大事ですが、皆さんもうお気づきの通り、これら四つの点は全て「I」で始まっています。この四つの「I」で始まる資質を「愛する（大切にする）」ことを心掛けてほしいというのが、今日の私のお話のオチにほかなりません。

## 結びとして——求められる資質はどうすれば身につくか？

最後に、これまで挙げてきたような資質を身につけるためにはどのようにしたら良いのか？ということについて結論として申し上げます。

まず第一に挙げたいのは、「他流試合」を心がけるということの重要性です。例えば剣道にはいろいろの流派があります。新陰流や柳生一刀流もあれば、二刀流もあります。徳川時代の日本では各藩に師範があり、弟子はそれぞれの師範の流派を学んで腕を磨きました。しかしそれだけでは、手の内の知れた同じ流儀の人としか剣を交えないことになります。「免許皆伝」といっても全く違った流派の相手と対峙する経験はないわけです。他流試合によって初めて一刀流の人が二刀流の人との異文化の経験を身につけることができるのです。グローバル社会における我々の活動についても同じことが言えます。このような異質の体験をすることによって、自分がより成長し、強くなり、活躍出来る人間になれるのです。

もう一つだけ、「學而不思則罔、思而不學則殆」という言葉を引いておきましょう。これは『論語』に出てくる言葉で、「学びて思わざれば則ち罔し（くらし）、思いて学ばざれば則ち殆し（あやうし）」と読みます。「習得」にいそしんでたくさんの知識を蓄えても、自らの頭を使って考えなければ活きた本物の知恵にはならない。逆に、考えるだけで思考を支える知識を身につけなければ、独善に陥る危険があるといった意味の言葉です。物を考えろと言われても、考える材料が頭になれば本当の智慧は出てきません。その意味では、知識を蓄えることは重要です。しかし、知識を単なる知識として詰め込むだけでは無意味なのです。「啼くよ（794）鶯平安京」という年号だけを頭に詰め込んでも、その知識は生きません。「8世紀末の日本はどういう状況にあったのか」、「なぜその時期に平安京遷都が行われたのか」といったことを考えるためのコンテキストとして年号は重要なのですが、詰め込み教育では知識を覚えさせることそれ自体が目的になってしまうのです。詰め込み教育の悪い点は、「何故それを覚えるのか？」ということを教えない点です。かつて「詰

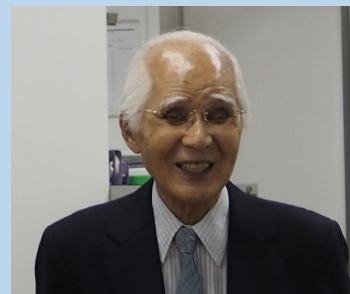


(外務省にてインタビュー／2017年10月)

め込み教育」は悪だという考えから「ゆとり教育」なるものが導入され、考えるための授業枠が設けられたことがありました。しかし、考えるために必要な材料（知識）を与えない授業枠は無意味だということが、その経験から識者の目にも明らかになったのです。

グローバル化する世界は、多様性の中に共通する普遍的価値の存在を必要とします。多様性と普遍性の双方を調律させながら生きていかなければならないこのような世界では、その多様性に引きずられないで、「自分はどう考えるのか？」ということ意識しなければなりません。多様性の中で共通性を見つけていくことが、これからの私たちに求められています。若い人々には頑張ってほしいと思います。

### ◆プロフィール／小和田 恆（おわだ・ひさし）



国際司法裁判所裁判官。1955年東京大学卒業、英国ケンブリッジ大学大学院修了。外務省に入省。条約局長、外務大臣官房長、外務審議官を経て1991年から1993年まで外務事務次官。

在外勤務では、在米日本大使館公使、在ソ連日本大使館特命全権公使などを経た後、特命全権大使に任ぜられ、経済協力開発機構（OECD）日本政府常駐代表及び国際連合日本政府常駐代表を歴任した。その後、財団法人日本国際問題研究所理事長、早稲田大学大学院教授。外務省顧問、世界銀行総裁上級顧問を務める。2003年国際司法裁判所裁判官。同裁判所所長。

アカデミズムの分野では、1962年から30年にわたり東京大学（国際法、国際機構論）で教鞭をとったほか、ハーバード大学、ニューヨーク大学、コロンビア大学などで教授（国際法）。主な著書として、『参画から創造へ——日本外交の目指すもの』（1994年、都市出版）、『外交とは何か』（1996年、NHK出版）などがある。

### ●国連大学との共催で開催する日英2か国語を使用した宿泊型セミナー

湘南国際村センターを会場として、世界情勢に即したテーマについて、国内外の学識経験者・専門家・実践者による講義やグループ討議を行います。留学生を含む大学院・大学生世代が世界の諸問題について集中して徹底議論します。将来、国際機関、NGO、学術研究等、グローバルに、あるいは地域の多文化共生に向けて活躍できる人材を育成します。2018年度は「持続可能な社会とジェンダー/セクシュアリティ——私たちに何ができるのか?」をテーマに開催します。

### ●全国各地からの申込みや留学生の参加も

毎年、全国から100名を超える参加申込みがあります。2017年度は、応募者数142人、小論文による審査を経て参加者数は86人（日本人学生59、留学生27）となりました。また参加した留学生の出身国は14カ国でした（ウズベキスタン、中国、ミャンマー、シンガポール、カンボジア、大韓民国、フィジー、メキシコ、ジンバブエ、コンゴ民主共和国、南アフリカ共和国、ネパール、タイ、バングラデシュ）。

### ●足もとから考える視点も身につける

地域で活動する団体の実践例を紹介する「かながわセッション」というプログラムでは、セミナーの内容に合わせて、NPO/NGO関係者などを講師に迎えワークショップを実施しており、地域での取組みを知ることで足もとからテーマについて考える視点を身につけることができます。

## かながわ国際交流財団（KIF：Kanagawa International Foundation）

神奈川県内で国際交流・協力を推進する中核組織として1977年に設立されました。2012年4月に公益財団法人の認定を受けています。「多様性を尊重する“かながわ”の人づくり・地域づくり」を重点目標として、神奈川県、県内自治体、国際交流協会、NGO/NPO、教育機関、福祉関係団体、企業などと連携しながら事業を実施しています。

今回インタビューさせていだいた小和田さんには、横浜事務所にもお出でいただき、財団で作成した「外国人住民のための子育てチャート」などについてご紹介しました。



### 【事務所】

|                  |                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------|
| 本部/湘南国際村学術研究センター | 〒240-0198 葉山町上山口 1560-39 湘南国際村センター内                               |
|                  | TEL: 046-855-1820~1822 FAX: 046-858-1210 E-mail: shonan@kifjp.org |
| 横浜事務所/多言語支援センター  | 〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター13階                          |
|                  | TEL: 045-620-0011（代表） FAX: 045-620-0025 E-mail: tabunka@kifjp.org |

※多様性が活きる神奈川のために～ご寄付のお願い～

4つの分野から指定できます。

- ①多文化共生の地域社会かながわづくり
- ②県民・NGOとの連携・協働による国際活動の促進
- ③国際性豊かな人材の育成
- ④学術・文化交流を通じた地域からの将来像の提案

振込先（郵便振替）： ゆうちょ銀行 00280-4-49894 公益財団法人かながわ国際交流財団

※通信欄にご希望の事業番号（①～④）をお書きください。ご寄付には税制上の優遇措置が受けられます。

クレジットカード・銀行振込でもご寄付いただけます。

お問い合わせ： 寄付担当 TEL：046-855-1820 E-mail: donation@kifjp.org